

り締めた。

五十二年の歳月をかみしめ、人類の恒久平和を祈り続けたい。

## 遼東哀史

長崎県 原 雅子

昭和初期、長野県出身の父と埼玉県出身の母は、当

時の国策に沿って渡満しました。旅順で生まれた私が物心つくころ、一家は大連に移りました。大連の市街は、帝政ロシアが粋を凝らした豪華な建物や、大きなデパートが立ち並び、幼心にも大都市でした。高度な生活水準の地にあつて、両親からの愛情と期待を一身に集め、絵にかいたような幸せな日々を過ごしていました。

大陸での戦域が拡大され、ついに昭和十六年太平洋戦争に突入しました。

緒戦の戦果に、国民は戦勝気分酔っておりまし

が、やがて親子三人の行く手には、言語に絶する悲劇が続発したのです。母の急逝、旅順への転居、旅順から徒歩による大連への逃避、引揚げ当日の父との別離、孤児となり佐世保に上陸、その後の苦難……。

奈落での過酷な運命を私個人の泣き言にとどめず、戦争が引き金となった一家の悲劇を史実として、平和の尊さを後世に語りつがねばならない。私にできる親孝行、それは、無念の死を遂げた両親の思いを受けて、平和を祈念することなのです。

小学校入学のころまでは優雅な暮らしをしておりましたが、太平洋戦争が勃発し、小学校が「国民学校」と改称されたころからは、大連の巷にも戦雲が垂れ込めていました。灯火管制、防空訓練、防空壕、金属供出等々。

年若い母は、国防婦人会の役員に推され、緋のモンペに割烹着姿で婦人会や隣組など公務に準ずる仕事をしていました。どんなに苦しいことがあつても、家庭ではいつも朗らかで、「ハァー またも雪空 夜風の

さむさ 遠い満州が エー 満州が 気にかかる」と、  
売れっ子歌手音丸の『満州想えば』を、明るく口ずさ  
んでいました。

元気で病氣一つしない母が、繁忙する諸行事の疲れ  
に加えて、悪化した食糧事情が原因の下痢に悩まされ  
ていたのです。体力の低下と貧血が重なり立ちくらん  
で転倒、運悪く後頭部を強打してそのまま息が途絶え  
ました。ときに、昭和十九年六月二十七日、三十二歳  
の若さでした。最愛の夫や一粒種のわが娘に、一言も  
残さず永久の別れとなったのです。

この世で掛け替えない母を失った私は十二歳、突  
然の信じられない出来事に、空を見上げては雲に母の  
面影を映して泣き、夜空の星に問い掛けては涙する私  
を哀れむ父は、悲しみに包まれて大連から旅順への転  
勤を希望し、八月末大連をあとにしたのです。

大連と異なる文教の街、風光明媚な旅順。父との不  
自由な生活のなかにも、心安らぐものがありました。

翌年三月に師範附属を卒業して、憧れの旅順高女に入  
学したものの、戦局は玉砕や本土空襲など暗い報道が

続き、学舎では、軍事教練や勤労奉仕の毎日でした。

八月十五日、信じられない日本の敗戦。母の死から  
立ち直ろうとしていた矢先に、厳しい追い打ちを受け  
ました。

鉄の固まりのような重戦車を先頭に、ソ連の囚人部  
隊と称される無秩序な集団が、マンドリン(自動小銃)  
をかざしながら旅順になだれ込んできました。口々に、  
「ダワイ、ダワイ(よこせ、よこせ)！」と叫びながら、  
腕時計や万年筆その他の金品や衣服までも強奪し、婦  
女を捕まえては連れ去る。まったくの無法地帯と化し  
たのでした。生命の危険にさらされる市街地から早く  
避難しなければと、近隣の方々とともに水師宮方面へ  
逃れました。

つてを求めて点在する日本人宅数軒に身を寄せまし  
たが、板戸を破って襲いかかるソ連兵士の凶暴さ、私  
自身も一度は大柄な兵士に抱きつかれる危機に見舞わ  
れました。

ここも危険だからと、数日後には意を決して徒歩で  
大連を目指したのです。数班に分かれて山沿いの小道

を小走りに、物陰に隠れては休み、めったに見つからない日本人宅を訪ねては初秋の夜露をしのぎ、数週間を経て大連にたどり着きました。

大連での生活はだれでも同様、「食べる」苦勞でした。恐怖の昭和二十年、生活苦の二十一年。その年の暮れから内地への引揚げが始まりました。年の瀬迫るある日、嶺前地区の第一次グルーブに私たち親子が組み入れられ、集結の日程は一月九日嶺前小学校と決まりました。ソ連軍から労働組合を通して厳命された荷物制限に従い、母のお位牌などと竹の子生活のなかで持ち耐えることができた品々をまとめ、当日の好天を祈っていましたが、前夜から猛吹雪となってしまうました。

午前八時、校庭に集まった約二千人は、雪のなか必死の形相でうずくまっています。そこから埠頭までを、五台ほどのトラックで折り返し輸送するという効率の悪さに、私たちの列に順番が回ってくるのは、午後二時を過ぎるころとなりました。いよいよこの次のトラックだと思われるときは、雪中の長時間に及ぶ待

機のために体のしんまで凍え、だれもが体力の限界に達していました。と、そのとき、私の傍らにいた父が、崩れるように倒れてしまったのです。

「神様！　どうか父を助けてください。もうすぐトラックがくるのです」と心のなかで叫びながら、必死で父の体をかばいましたが、過勞と栄養失調の父の体温は、容赦ない寒気に吸い取られ顔面蒼白でした。このアクシデントに駆け付けてきた救護所の人は、父にすがりつく私を引き離しながら、「救護所で応急手当をしますので、貴女はこの場を離れないでいるのですよ！」と厳しい叱咤。うつろな父の寂しそうな顔。そのまま担架の父は搬送されました。

無常なり。これが父との今生の別れとなってしまうのです。

周囲見知らぬ人ばかりで、それぞれが、わが身をかばうのに精一杯です。私は寒さと心細さのために、体がガタガタと音を立てるほどに震えていました。

やがてトラックが到着し、周囲の人々が乗り込みはじめたとき救護所の人に戻ってきました。「お父さん

がね……、「私は駄目だから、娘一人でも埠頭に行つて、早く内地に帰れるようにしてください」と、言っておられました……」と。そのような意味のことが父の伝言だと言うのです。「お父さんに会わせて！ お父さんの所に連れて行って！」と、泣き叫ぶ私。「貴女が無事に内地に帰ることが、お父さんのお願ひなんですよ」。同情とも命令ともつかぬ言葉とともにトラックの荷台に押し上げられてしまいました。嶺前小学校から遠ざかるトラックから、何度飛び降りようと思つたことか。

「後ろ髪を引かれる思い」とは、まさにこのこと。父の身を案じながらも指定された引揚船「第一大海丸」に乗船させられました。

すし詰め状態の船内の息苦しさ、内地での身寄りを知らない不安等々に、私は身も心もポロポロになっていました。大荒れの海原を数日航海したころ、「日本が見えるぞ！ よかった、よかった。内地に帰られた」と叫ぶ声。それが船内の隅々まで響きわたりました。念願だった祖国の眺望に歓喜する人々を見つめては、

「お父さまと一緒にいたら私も喜び合えたのに」と、またしても悲しみがこみ上げるのでした。

私にとって初めての日本。その佐世保に上陸して数日後、収容所の職員から、「後から大連を出航した船からの連絡ですが、お父さんは一月九日の午後五時に亡くなられたそうです」との悲報。父を見届けられなかった私には、悔いとも信じられないことでした。そのときから、孤児として内地での波瀾万丈の歩みが始まりました。

二年半ほどのあいだに、両親を相次いで失い、十四歳の少女は天涯孤独になりました。戦前の平和な生活のひとつまが、父母をしのぶ唯一の面影です。戦争が、善良な民間人の家庭や生命を無残に奪い取りました。母の遺骨を安置していたお寺も定かではなく、父の最期を記すものや葬られた場所も伝え聞くことはできませんでした。この世に生を授けてくれた父母。その父母の遺骨は戦後五十年を経ながらも、彼の地に取り残されたままになっております。

歲月過ぎて、現在の私は新たな幸せに恵まれました。優しい夫や愛しい子供に支えられています。クラスメートから寄せられる温かい友情などもございます。

毎年七月九日、佐世保のハウステンボスに近い「釜墓地霊園」で執り行われる戦没者慰霊祭に、テレビ局からのご縁を得て参列させていただきました。ここに父母の御霊も眠っていると信じながら心静かに冥福を祈っております。

## 満蒙開拓青少年義勇軍

長崎県 藤原安男

昭和十三年五月三日、長崎県先遣隊二百五十余人は諏訪神社の丸馬場に集合、県庁の係の人の諸注意があり、その後神社への祈願を行い、神社の正面長坂で全員の記念写真を撮った。近くの勝山小学校で壮行会があり、夜行列車で長崎駅を出発、翌日東京駅で下車、皇居遙拝、靖国神社参拝の後、上野駅から常磐線で茨

城県内原訓練所に向かった。五月五日内原訓練所着。そして、義勇軍としての訓練が始まった。

この訓練所では見知らぬ者同士であるから、特に団体生活に慣れるための訓練が主であった。

長崎県出身の半数と山形県出身で一個中隊が編成され、中隊は五個小隊に分かれ一個小隊ずつが日輪兵舎で起居を共にした。

お互いに言葉が通じない。ラジオもない時代。初めて聞く東北弁。これも日本人の言葉かと驚いたが相手も同じであったろうと思う。「カネのおわんに竹のはし、仏様でもあるまいに一膳飯とは情けなや」という『軍隊小唄』という歌があるが、それをもじった軍隊生活の「金の茶碗に金の箸、仏様でもあるまいに……」という言葉はそのまま義勇軍も同じで、金の茶碗の一膳飯だった。毎日の起居とまた軍隊と同じ、ラップで起きてラップで寝る生活であった。

私が物心ついたころは農家は全部が貧乏のどん底であり、貧乏人の子沢山であった。私は十一人兄弟の二男として生まれたが、農家では口減らしのため小学校